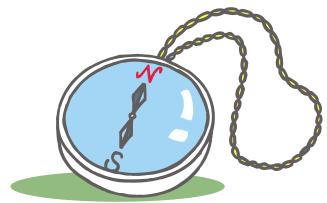


羅針盤



第 21 号

令和6年11月25日(月)

◆ 「よき人に近づけば覚えざるによき人になるなり」

将棋界では、現在のところ「七冠」を保持している藤井聰太（ふじいそうた）さんをはじめとして、「竜王」のタイトルを保持している伊藤匠（いとうたくみ）さんなどの若手棋士たちが台頭してきています。2010年（当時は74歳）に引退された、将棋棋士として有名な有吉道夫（ありよしみちお）さんを生徒の皆さんは知っていますか。1000勝以上の勝ちを積み上げ、凄腕の棋士として名を馳せていましたプロの棋士です。有吉さんは15歳の時に、プロ棋士を目指すために、大山康晴（おおやまやすはる）さんという超一流の棋士の下に弟子入りをします。内弟子といって、家を出て住み込みで働く弟子です。師匠と一緒に生活をしていれば、将棋の打ち方をたくさん教えてもらえるはずだと考えたからです。しかしながら、4年間の住み込み期間で、有吉さんが師匠である大山さんから直接将棋の指導を受けたのは、わずかに3回でした。ほとんど直接教えてもらうようなことはありませんでした。それでは、住み込み期間に有吉さんはいったい何をしていたのでしょうか。もちろんのこと、一つは将棋の修行です。師匠の行う対局を見たり、本を読んだり、同じプロ棋士を目指す仲間と打ち合ったり、・・・と将棋の勉強を怠るようなことはありませんでした。それ以外の時間は、掃除や洗濯などをしていました。有吉さん自身、「住み込み期間のほとんどは師匠の身の回りのお世話をしていました。」と言っておられます。このような師匠と弟子の在り方といったものは、有吉さんと大山さんだけが特別なのではなく、他の師匠と弟子の関係も同じようなものです。将棋の世界だけでなく、落語や漫才の世界などにもこういった師弟関係が存在します。では、なぜ師匠は直接指導をすることもなく、身の回りの世話をさせているのでしょうか。その根底には、「技術だけをいくら真似をしたところで上達することはない」といった



考え方があるからです。切迫した勝負の場面では、技術だけでなく、それよりも「精神力」や、「判断力」、「勘」といったことが起因して、勝負の命運を左右してしまうことが多いからだと言われます。別の言い方で置き換えるのであれば、その人自身が持つ「人間力」が勝負を大きく左右するということのようです。弟子は日ごろから師匠の身の回りの世話をしながらも、常に師匠の側にいることで師匠の「生き方」といったことを学んでいるわけです。日々、「人間力」に磨きをかけ、「人として成長する」ことで、将棋の技術も総合的に向上していくことに繋がっているわけです。日本における曹洞宗の開祖である道元（どうげん）が広めた言葉に、「霧の中を歩けば覚えざるに衣しめり、よき人に近づけば覚えざるによき人になるなり」があります。この言葉は、「霧の中を歩いていると気づかぬうちに服が濡れてしまっているように、良い人の側にいることで気づかぬうちに自分もまた良い人になっている」という意味を表した言葉です。つまりは、「良き人」に囲まれて過ごすことで、自分自身も良い方向に成長していくことができるということです。日常の学校生活の中で、より良い人間関係を築きあげていくことを心掛け、たくさんの人との出会いをこれからも大切にしてほしいものです。生徒の皆さんには、是非多くの「良き人」との出会いを通じ、向上心を忘れることなく、大きく成長していってもらいたいと思います。